

# 青少年のボランティア意識の構造に関する研究

## —ボランティア研修の今後の方向性についての検討—

林 幸克

(国立オリンピック記念青少年総合センター (非))

谷井 淳一

(国立オリンピック記念青少年総合センター)

### 【要旨】

国立青少年教育施設 13 施設が主催したボランティア研修会の参加者を対象に質問紙調査を実施した。ボランティア研修会の効果について検討した際に得られた5つの因子（コミュニケーションの自信、ボランティアの多様性の理解、解説技能を伴う指導性、自己実現への意識、国際性）について、高校生・大学生別の変容と、因子間の関連について分析した。将来の希望を表す2因子（自己実現への意識、国際性）を目的変数、現在の状況を表す3因子（コミュニケーションの自信、ボランティアの多様性の理解、解説技能を伴う指導性）を同時に説明変数とする重回帰分析を行った。その結果、高校生の場合、研修で「ボランティアの多様性の理解」を深めることが「国際性」を高めることにつながり、また、大学生では、「コミュニケーションの自信」を高めることが、「自己実現への意識」と「国際性」を高めることにつながっていることが明らかになった。

### I. はじめに

生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」（1992年）において、当面重点を置いて取り組むべき課題の一つとして、「ボランティア活動の支援・推進について」が挙げられた。その中で、「ボランティアとして活動するための基礎的な学習機会の充実や、学習の成果と能力を生かした活動の場の開発が今後の課題」とされている。この課題に対応すべく、行政や民間等で、ボランティアの養成を目的とした様々な研修会が実施されている。

そうした研修会を通して、ボランティア活動について理論的な理解を深め、実習を通じて実践力を身に付けることは、ボランティアとして活動していく上で必要不可欠である。そこで、ボランティアに求められる意欲や能力を高めるための研修会の効果について、林・谷井<sup>(1)</sup>は、研修会を通して参加者の変容が見られると思われる「研修会の効果に関する項目」として29項目を決定し、ボランティア研修会の効果測定尺度を作成した。29項目について、主因子法・バリマックス回転を用いて因子分析したところ、「コミュニケーションの自信」、「ボランティアの多様性の理解」、「解説技能を伴う指導性」、「自己実現への意識」、「国際性」の5因子が抽出された。すべての因子で参加者の向上が見られたが、その中でも、とりわけ「ボランティアの多様性の理解」と「自己実現への意識」の向上が大きく、ボランティア研修会によって、生涯学習社会における自己実現への意識

が高まり、ボランティア活動が多種・多様な広がりを見せる活動であるという認識を高めていることがうかがえた。

この結果、参加者の全体的な傾向が明らかにされたが、学校種別の効果の違いについては検討されていない。また、青少年のボランティア意識形成について、5つの因子がどのように関わりあっているのかについても未検討である。高校・大学別に実態を把握することとボランティア意識形成を解明することは、今後ボランティア研修会を展開していく上で、研修プログラムの内容や構成に関する貴重な示唆が得られるのではないかと思われる。

そこで本研究では、ボランティア研修会の効果について、高校生と大学生による違いを明らかにし、5因子間の関連をもとに、高校生と大学生のボランティア意識の構造について検討する。

## II. 調査対象及び調査内容

2000年5月～2000年8月に、国立青少年教育施設が主催したボランティア研修会に参加した高校生、大学生等を対象に、記名式質問紙調査を行った。13施設14事業の協力を得て、研修会の開講式で事前調査を、閉講式で事後調査を実施した。その中で、事前調査と事後調査の両調査にもれなく回答した有効回答者716人のデータを用いて因子分析を行った。その中から、高校生と大学生のデータを抽出し、さらに詳細な分析を行った。

表1 男女別・学校種(学年)別参加者構成

(上段:人数, 下段:%)

	高校1年	高校2年	高校3年	大学1年	大学2年	大学3年	大学4年	小計	無回答	合計
男子	10 (1.8)	35 (6.2)	53 (9.4)	6 (1.1)	17 (3.0)	28 (4.9)	11 (1.9)	160 (28.3)	2	162
女子	85 (15.0)	115 (20.3)	134 (23.6)	7 (1.2)	27 (4.8)	23 (4.1)	15 (2.7)	406 (71.7)	1	407
合計	95 (16.8)	150 (26.5)	187 (33.0)	13 (2.3)	44 (7.8)	51 (9.0)	26 (4.6)	566 (100.0)	3	569

回答者の内訳を見ると、男子160人(高校生98人、大学生62人)、女子406人(高校生334人、大学生72人)であった(表1)。

林・谷井<sup>(2)</sup>が作成したボランティア研修会の効果測定尺度は全29項目からなるもので、因子分析の結果、5因子が抽出されている。第1因子は、障害者や高齢者、子どもに対してやさしく接することができる、様々な国の人々に親切に接することができるといった6項目からなる「コミュニケーションの自信」、第2因子は、生涯学習ボランティアについてよく知っている、ボランティアの活動分野・領域の広さを知っているといった7項目から構成される「ボランティアの多様性の理解」、第3因子は、見本を示してわかりやすく解説するのが得意である、状況判断を的確にして他者を導くことができる等の5項目からなる「解説技能を伴う指導性」であった。第4因子は、他者に奉仕することは自分の人生を充実させる、新しく身につけた学習成果を様々な場で活用したいといった4項目で構成される「自己実現への意識」、第5因子は、異国の文化や言語などに興味・関心があ

る、国際的な分野で活動・仕事がしたいという2項目からなる「国際性」であった。

### Ⅲ. 調査結果と考察

データ入力に関して、「きわめてあてはまる」を4点、「かなりあてはまる」を3点、「わりとあてはまる」を2点、「少しあてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点として得点化した。また、因子合成得点に関して、例えば「コミュニケーションの自信」について、因子を構成する6項目の合計点を算出し、その合計点を6で割り、因子合成得点とした。全ての因子について同じ手続きをとり、比較しやすくするために、因子合成得点はすべて4点満点となるようにした。

#### 1. 分散分析による考察

因子ごとに時期（被験者内要因）×学校種（被験者間要因）の2要因分散分析を行った（表2）。また、交互作用が有意となった場合、下位検定として、高校生・大学生別に対応のあるt検定を行った。

表2 ボランティア研修会前後の参加者の変容(高校生・大学生別)

(4点満点)

	高校生		大学生		分散分析結果(F値)						
	事前調査(435人)		事後調査(435人)		主効果		交互作用				
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	学校種	時期					
コミュニケーションの自信	2.49	(0.78)	2.83	(0.83)	2.51	(0.79)	2.61	(0.76)	n.s.	71.0**	21.2**
ボランティアの多様性の理解	1.09	(0.69)	1.78	(0.83)	1.16	(0.82)	1.63	(0.90)	n.s.	351.8**	11.6**
解説技能を伴う指導性	1.34	(0.82)	1.78	(0.95)	1.64	(0.88)	1.89	(0.85)	n.s.	160.4**	10.9**
自己実現への意識	2.44	(0.81)	2.98	(0.85)	2.68	(0.78)	2.93	(0.77)	n.s.	168.9**	20.5**
国際性	2.14	(1.16)	2.40	(1.18)	2.23	(1.13)	2.26	(1.14)	n.s.	15.0**	8.9**

\*\*p<.01

#### (1) 「コミュニケーションの自信」の変容

「コミュニケーションの自信」について見ると、時期の主効果と交互作用が有意であった。交互作用を優先して下位検定を行うと、事前調査と事後調査の平均値に関して、高校生には有意差が見られたが、大学生では有意な差がなかった（図1）。すなわち、様々な人に対するコミュニケーションに関わる自信について、研修会を受けることで、高校生には向上が見られたが、大学生ではあまり向上していなかった。

地域において人間的なつながりを形成するためには、相互のコミュニケーションが求められるよう。そうしたコミュニケーションが自信を持ってできることは、対人関係を円滑に

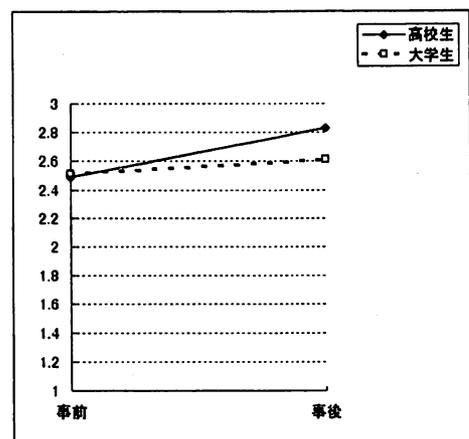


図1 高校生・大学生別「コミュニケーションの自信」の変容

することが可能なばかりではなく、相互の触れ合いを通して相手の気持ちを理解するに至り、「老人介護とか障害者の支援のように直接手助けをするような活動」<sup>(3)</sup>への取り組みも促進し得るのではないかとと思われる。高校生が、研修によって、ボランティア活動を行う際の重要な基盤ともなる「コミュニケーションの自信」を高めていることは大きな成果である。

大学生にはあまり向上が見られなかったが、その要因にはコミュニケーションに対する認識が高校生と異なることがあるのではないかとと思われる。高校生は他者と接することができれば、その関わり方の大小に関係なく、それをコミュニケーションとして考えているのかもしれない。そのため、普段あまり接する機会のない他者と会話をしたりゲームなどができることで、研修前よりもコミュニケーションできるようになったと考え、その自信も大きく向上しているのではないかとと思われる。他方、大学生は、あいさつを交わすなどの表面的な関わりだけではなく、相手の気持ちを汲んで接触・行動するような、もっと親密な関わりを要することをコミュニケーションとして捉えているのではないだろうか。そうしたコミュニケーションがとれるようになるためには、お互いの信頼関係を築くことが求められ、ある程度の時間が必要になる。したがって、短期間の研修<sup>(4)</sup>では「コミュニケーションの自信」を向上させるまでには至らなかったのではないかと考えられる。

## (2)「ボランティアの多様性の理解」の変容

「ボランティアの多様性の理解」について、時期の主効果と交互作用が有意であった。高校生・大学生別に見ると、高校生も大学生も共に有意差が見られた(図2)。この結果から、高校生・大学生ともに事前調査よりも事後調査の方が得点が高く、ボランティアの多様性に対する理解が向上しているが、高校生の方が向上の割合がより大きいといえる。

ボランティアの多様性と一言で括ってもその捉え方は様々であると思われる。活動内容や領域の広がり、**「社会福祉の分野のほか、教育、文化、スポーツ、学術研究、国際交流・協力、人権擁護、自然環境保護、保健・医療、地域振興など多岐にわたっている」**<sup>(5)</sup>。

また、参加者層の拡大という面では、「**阪神・淡路大震災やタンカー海難による石油流出事故、さらには長野冬季オリンピック・パラリンピック等を契機に、ボランティア活動は国民の間に大きな広がりをもって行われるようになってきている**」<sup>(6)</sup>。高校生や大学生にとって、自分でも取り組むことができる活動があることに気付くことは、ボランティアとして活動を始める第一歩であり、それが、参加者層の拡大にもつながると思われる。山田<sup>(7)</sup>は、中央社会福祉審議会地域福祉専門分科会「**ボランティア活動の中長期的な振興方策について(意見具申)**」(1993年)の基本的な方向性として、今後、めざすべき21世紀の社会である参加型福祉社会の構築には、多様なボランティア活動の存在が欠かせないと

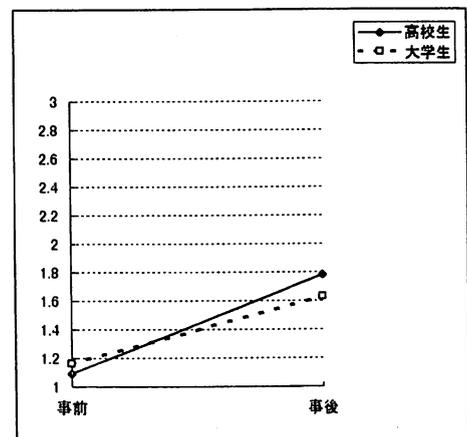


図2 高校生・大学生別「ボランティアの多様性の理解」の変容

いうことを指摘している。高校生と大学生が「ボランティアの多様性の理解」を深めていることは、今後ボランティアとして多様な分野で活動することが期待でき、ボランティア活動の振興を後押しすることにつながるのではないかと考えられる。

### (3) 「解説技能を伴う指導性」の変容

「解説技能を伴う指導性」でも、時期の主効果と交互作用が有意であった。高校生・大学生別に見ると、高校生と大学生ともに有意な差があった(図3)。つまり、両者とも研修によって、解説する技能とそれに伴う指導への自信を高めているが、高校生の方が大学生よりもその自信の高まり方が大きいといえる。

他者に対して、言葉や動作で示しながら物事を説明したり指導することは容易なことではない。短期間の研修でそうした指導性が向上しているのは、効果的なプログラム編成がされたためであろう。高校生・大学生はその発達課題としてアイデンティティの確立などが挙げられているが、他者との関わりの中で指導性を発揮する場が与えられ、そこで成果を納めることができれば、「解説技能を伴う指導性」に自信を持つことが可能になり、他者との関係の中で自分の役割を確認することが可能になるのではないかとと思われる。讃岐<sup>6)</sup>が、「知識や技術、あるいは特技などを提供して、他の人の学習を指導したり援助したりするボランティアがいないことには、生涯学習社会は殆ど実現不可能に近いともいえる」と指摘するように、生涯学習社会に「解説技能を伴う指導性」を有したボランティアは不可欠である。その意味でも、高校生・大学生が研修によってそうした指導性の自信を高めていることは意義がある。さらには、その中から、自信を高めた指導性を活かして、ボランティア活動希望者とボランティアをして欲しい人とを対等につなぎ、共感の関係づくりをする、高度な資質をもつボランティア・コーディネーター<sup>9)</sup>が出て、活動することが望まれよう。

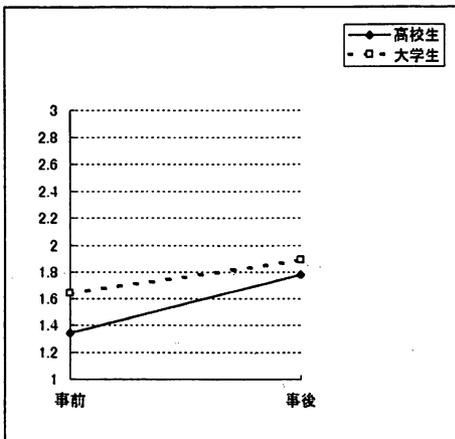


図3 高校生・大学生別「解説技能を伴う指導性」の変容

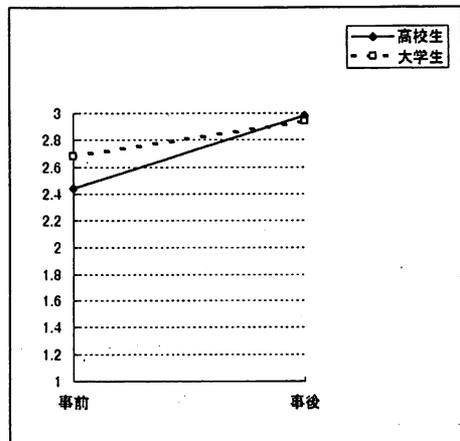


図4 高校生・大学生別「自己実現への意識」の変容

### (4) 「自己実現への意識」の変容

「自己実現への意識」についても、時期の主効果と交互作用が有意であった。高校生・大学生別では、高校生と大学生ともに有意な向上が見られた(図4)。このことから、

高校生、大学生ともに、研修会を通じて学習成果をボランティアとして活用し、自己実現を図ろうとする意欲が向上しているといえる。また、その向上の仕方は、大学生よりも高校生の方が大きい。

伊藤<sup>(10)</sup>は、ボランティアの自己開発性に着眼し、その学習性は「ボランティア活動による自己の開発である。人間は、自己開発、人間関係、役割感に喜びを見つけだす。自己開発とは、ボランティア体験などによって自分の才能や可能性を見いだし、それを磨く緊張感をもたらす楽しみである。人間関係とは、ボランティア活動の相手や活動仲間が醸し出す喜怒哀楽を呼び起こす興奮であり、仲間意識や依存感情が満たされる喜びである。また、役割意識とは、ボランティア活動の実践によって自分がみんなに認められた、という安定感であり、自分も社会の役に立っているという満足感である」と述べ、ボランティアに取り組むことで、こうした楽しみ・喜びを体験し、それを経て自己を確立すると指摘している。ボランティア活動を、「自分自身が知恵と能力と情熱を活かして社会に貢献していることを実感できる、かけがえのない活動」<sup>(11)</sup>として捉えることができれば、高校生・大学生の自己の確立を促進することが可能であると思われる。

### (5)「国際性」の変容

「国際性」も、時期の主効果と交互作用が有意であった。高校生・大学生別では、高校生には有意な向上があったが、大学生には向上が見られなかった(図5)。つまり、将来的な希望として国際的に活動しようとする意欲が、高校生では向上したのに対し、大学生はそれほど向上しなかった。

2001年は国連総会によってボランティア国際年として定められた。ボランティア活動が、「自らの自由意志を持って社会に参加し、社会をつくり、社会を変革するすべての人々に与えられた基本的権利として、世界中で認識されるようになってきた」<sup>(12)</sup>現在、日本国内の活動だけにとどまることなく、国際的な活動に取り組もうという高校生や大学生などが出現するのは自然な動きであろう。青少年教育施設などでボランティア研修会が行われたり、「各種の国際ボランティア会議やボランティア・コーディネーションに関する国際的研修プログラムも開催されるようになってきた」<sup>(13)</sup>今日、そうした研修を通して、高校生や大学生といった若い世代が「国際性」を高める機会が整いつつあると考えられる。

高校生の場合、国際的な活動への意欲がやや高まり、国際的な関心が促進されている。しかし、「国際的交流としては、発展途上国との技術移転をはじめ、スポーツや文化の興隆など多くの分野があり、これらのなかで民間のボランティアが果たす役割も非常に大きくなって」<sup>(14)</sup>いることを考慮すると、高校生はもちろんであるが、大学において高等教育を受けて専門性を身に付けていると思われる大学生の活動がより求められるケースも

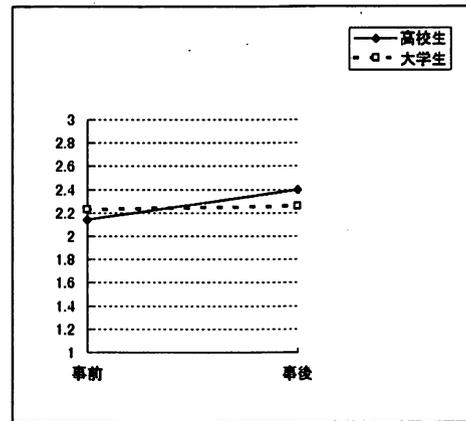


図5 高校生・大学生別「国際性」の変容

多々出てくるであろう。

## 2. 重回帰分析による考察

ボランティア研修会の効果測定尺度を構成する5因子のうち、第1因子「コミュニケーションの自信」と第2因子「ボランティアの多様性の理解」、第3因子「解説技能を伴う指導性」は、現在の意欲や能力についての自己理解を表しているのに対して、第4因子「自己実現への意識」と第5因子「国際性」は、将来的な活動の希望を表している。したがって、現在の状況を表す前者の3つの因子から、将来の活動を表す後者の2つの因子に向けての因果関係を仮定することは可能であろう。そこで、高校生・大学生別に後者の2因子をそれぞれ目的変数とし、前者の3因子を同時に説明変数とする重回帰分析を行うことにする(表3、表4)。

なお、表中の数値は標準偏回帰係数( $\beta$ )を表し、この値が大きいほど、目的変数である「自己実現への意識」と「国際性」に対する影響力が大きいことを意味する。

表3 重回帰分析結果(高校生)

	自己実現への意識		国際性	
	事前調査	事後調査	事前調査	事後調査
コミュニケーションの自信	.37**	.43**	.12*	.10
ボランティアの多様性の理解	.14**	.19**	.16**	.43**
解説技能を伴う指導性	.22**	.21**	.22**	.10
R <sup>2</sup>	0.39**	0.54**	0.17**	0.33**
adj.R <sup>2</sup>	0.39**	0.54**	0.17**	0.33**

\*\*p<.01 \*p<.05

表4 重回帰分析結果(大学生)

	自己実現への意識		国際性	
	事前調査	事後調査	事前調査	事後調査
コミュニケーションの自信	.56**	.56**	.48**	.37**
ボランティアの多様性の理解	.03	.02	.09	.16
解説技能を伴う指導性	.20*	.23*	-.01	.08
R <sup>2</sup>	0.52**	0.55**	0.29**	0.30**
adj.R <sup>2</sup>	0.50**	0.53**	0.28**	0.28**

\*\*p<.01 \*p<.05

### (1) 「自己実現への意識」形成

表3・表4から全体を概観すると、「自己実現への意識」に対して、「コミュニケーションの自信」が最も大きく影響( $\beta = .37 \sim .56$ )しており、次いで「解説技能を伴う指導性」との関連( $\beta = .20 \sim .23$ )が大きかった。「ボランティアの多様性の理解」については、高校生はやや影響があった( $\beta = .14 \sim .19$ )が、大学生の場合では関連がなかった( $\beta = .02 \sim .03$ )。また、事前調査と事後調査で比較しても、3因子からの影響の受け方は同様のものであることがわかる。

この結果から、学習成果を継続的に活用する意欲や、他者のために行う活動が自己実現につながり得るという意識には、他者に対するコミュニケーションに関する自信が最も大きく関わっていることがわかる。自分が学んできた学習成果を活用することによって、他者のために活動しようとするれば、その過程で対人的な関わりが必要となることは十分に考えられる。そのため、他者への「コミュニケーションの自信」は、自己実現に向けての意識の高さに不可欠であると思われる。あるいは、いくら自己実現といっても、自分ひとりで物事に取り組んだり、努力するだけでは十分ではなく、他者との関わりの中で、それがどのように位置づけられ、活用できるのかに関しての自信が伴わないと動機づけが高まらないであろう。そのため、他者と関わり合う中で「自己実現への意識」を再認識するという意味でも、「コミュニケーションの自信」が持つ影響力は大きいのではないかと考えられる。

「解説技能を伴う指導性」が、次に影響力があった。ボランティア活動には、道具の使い方などを見本を示してわかりやすく解説したり、集団へのゲーム指導などを通して、指導性を発揮する場面も生じよう。対人関係に関するスキルには、指導性が必要となる場合と、特に必要としない場合がある。そのため、指導場面がなく、他者と対等な立場で接するという意味で「コミュニケーションの自信」が最も大きく関わり、指導性を伴った対人関係スキルとしての「解説技能を伴う指導性」がそれに次ぐ影響を与えるという結果になっているのではないかと考えられる。

他方、「ボランティアの多様性の理解」との関わりは他の2因子に比べて小さかった。「コミュニケーションの自信」や「解説技能を伴う指導性」は実践的なスキルを示しているのに対して、「ボランティアの多様性の理解」は、生涯学習ボランティアについて理解したり、ボランティアの活動分野・領域の多様性を認識する等の事実の理解である。このことから、ボランティアに関する理念的な理解よりも、「コミュニケーションの自信」や「解説技能を伴う指導性」のような実践的スキルの方が「自己実現への意識」との関連が大きいという結果になった。

高校生と大学生を比較すると、両者の「解説技能を伴う指導性」の影響の有無に違いが見られた。この点について、高校生の場合、ボランティア活動の内容や形態の多様さ・広がり理解することで、その中から、自己実現に向けて自分に適した、取り組みやすいボランティア活動を見つけ出しているのではないかと考えられる。他方、大学生では、「自己実現への意識」に対して「ボランティアの多様性の理解」は関連がなかった。

## (2)「国際性」に関しての高校生・大学生の違い

表3・表4から全体を見ると、「国際性」については、「自己実現への意識」の場合と異なり、3因子からの影響の受け方が高校生と大学生で異なるため、高校生と大学生を別々に分析・検討を行う方が適切であろう。

本研究でいう「国際性」は、異国の文化や言語などに興味・関心があり、国際的な分野で活動・仕事がしたいという、将来的な希望を表している。そうした「国際性」に対して、高校生は、事前調査では「解説技能を伴う指導性」( $\beta = .22$ )、「ボランティアの多様性の理解」( $\beta = .16$ )、「コミュニケーションの自信」( $\beta = .12$ )の3因子すべてがやや影響を与えている。

大学生では、高校生と比較して、事前調査において「国際性」に関する「コミュニケーションの自信」との関わり ( $\beta = .48$ ) がきわめて大きく、「ボランティアの多様性の理解」と「解説技能を伴う指導性」からの影響はほとんどない。大学生では、事後調査でもそれは同じ傾向である。

青少年問題審議会は、青少年がボランティア体験する機会や場の積極的開発について、「青少年が国際感覚を習得し、国際的視野でボランティア活動に取り組む契機とするため、諸外国においてボランティア活動を実際に現地で体験する機会を設けることも必要である」<sup>(15)</sup>ことを述べている。「国際性」に関して様々な側面から影響を受けている高校生が、実際に海外においてボランティア活動を体験することは、いろいろな刺激を受けて触発されることになり、「国際性」を大きく伸ばさせる可能性があるのではないかと思われる。大学生は、「自己実現への意識」で考察したように実践的スキルからの影響が大きい。高校生は実践的スキルからの影響と共に、理念的な理解も実践的スキルと同程度に影響を与えると考えられる。興相は、『学生ボランティアへの要望等調査』結果から、「団体が行うボランティア活動のなかで、学生が占めるボランティア活動量の割合については、海外協力、環境保護、社会福祉団体などにおいて50%以上の比率であり、とくに受け入れ団体・施設においては、学生の活動参加が大きな比重を占めていることがうかがえる」<sup>(16)</sup>としている。

### (3) 「国際性」に関する高校生の研修会前後の重回帰分析結果の比較

高校生の場合、事前調査の5因子間の重回帰分析結果と、事後調査の重回帰分析結果に違いがあった。「国際性」に対する「ボランティアの多様性の理解」との関連に大きな違いがあり、事前調査 ( $\beta = .16$ ) に比べ、事後調査 ( $\beta = .43$ ) では、関連が大きくなった。また、「コミュニケーションの自信」と「解説技能を伴う指導性」は、事後調査では有意な関連がなくなった。

この変化は、高校生は、研修を受けることによって、ボランティアの多様性の理解が深まると、「国際性」も同時に高まった結果と考えることも可能であろう。表2を見ると、「ボランティアの多様性の理解」は事前調査(1.09点)から事後調査(1.78点)で0.69点増加しており、それと同時に「国際性」も高まっているのではないかと考えられる。そのため、「ボランティアの多様性の理解」と「国際性」の2つの変数間の標準偏回帰係数が、事前調査の.16から事後調査の.43に変化したのではないかと。

「ボランティアの多様性の理解」の中には、“海外のボランティア事情について理解がある”という項目があり、ボランティアの国際的な動向に関する理解も含まれている。高校生の場合、このような知識的な理解の深まりが、国際的に活躍しようという意欲を高められていると考えられる。国際的な広がりを見せる様々な活動において、ボランティアの活躍の場は多々あろう。そのために、実際に体験することはもちろん大切であろうが、高校生では、理念的な理解を深めることが、「国際性」を高めることにより大きく影響すると思われる。

## IV. まとめ

分散分析の結果を見ると、5因子とも大学生よりも高校生の方が向上の割合が大きかつ

た。このことから、ボランティア研修会は、大学生よりも高校生に対して効果的であるように思われる。つまり、ボランティア研修会は、学校段階、あるいは年齢段階が早いうちに実施することで、より大きな成果が得られるのではないかと考えられる。

その要因として、高校生は、大学生と比較すると生活体験・社会体験等が少なく、自分の将来について真剣に考える機会もそれほど多くないことが挙げられるのではないかと思われる。そのため、ボランティア研修会に参加することによって、様々な体験をする機会や、他者との出会いから受ける刺激を敏感に感じ取っているのではないかと考えられる。そのように考えると、5因子に示されるような側面が大きく向上する可能性を秘めている早い段階で、研修を受ける方が好ましいと解釈できよう。別の視点から見ると、大学生の方が、自分を客観的、または冷静・厳格に自己分析・評価しているのではないかとも思われる。そのため、高校生と比べると、向上の割合が小さかったのではないかとも考えられる。

また、重回帰分析では、高校生と大学生のボランティアに関する意識の関連を明らかにした。高校生、大学生ともに、「自己実現への意識」に対して、「コミュニケーションの自信」、「解説技能を伴う指導性」、「ボランティアの多様性の理解」の順で影響を受けているが、「コミュニケーションの自信」との関連が特に大きかった。つまり、「自己実現への意識」の高さには、高校生・大学生とも「コミュニケーションの自信」を深める機会を設け、「解説技能を伴う指導性」を発揮できるようなプログラム構成が望まれる。つまり、他者と関わる機会が十分に整えられている内容を取り入れ、対人関係スキルを涵養することが必要であろう。

「国際性」については、高校生と大学生で、3つの因子からの影響の受け方に相違があった。事前調査において、高校生は、「解説技能を伴う指導性」、「ボランティアの多様性の理解」、「コミュニケーションの自信」のそれぞれから同程度の影響を受けていたが、研修を経て、「ボランティアの多様性の理解」から受ける影響が大きくなった。他方、大学生は他者に対する「コミュニケーションの自信」が最も大きく影響していた。「国際性」を高めるためには、高校生では理念的な理解である「ボランティアの多様性の理解」を深めるような研修を、大学生では実践的スキルとして「コミュニケーションの自信」を高めることができるような研修を企画・実践することが望まれる。

#### 注記・引用文献

- (1) 林幸克・谷井淳一『青少年教育施設におけるボランティア研修会の効果に関する検討』（『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』創刊号，2001）pp. 9-19
- (2) 前掲(1) pp. 9-19
- (3) 本田尚士『ボランティア活動へのいざない』建帛社，1993，pp. 44-45
- (4) 本研究で取り上げた14事業の研修期間は、1泊2日が5事業、2泊3日が8事業、3泊4日が1事業であった。
- (5) 生涯学習審議会『今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について（答申）』1992
- (6) 生涯学習審議会『学習の成果を幅広く生かす（答申）—生涯学習の成果を生かすための方策について—』1999

- (7) 山田秀昭『行政主導型ボランティア育成から行政によるサポート体制へ』（『ボランティア白書 1995 年版「ボランティアライフ」新時代』）， 社団法人日本青年奉仕協会， 1995， pp. 86-91
- (8) 讃岐幸治『息するだけの人生か， 粹な人生か』（『ボランティア白書 1995 年版「ボランティアライフ」新時代』）， 社団法人日本青年奉仕協会， 1995， pp. 77-81
- (9) 島田京子『NPO とのパートナーシップによる企業の社会貢献』（『ボランティア白書 1999 わたしたちがつくる新しい「公共」』）， 社団法人日本青年奉仕協会， 1999， pp. 182-190
- (10) 伊藤俊夫『学校教育におけるボランティア活動の位置づけ』（『教育と文化』第 44 号）， 神奈川県立教育センター， 1999， pp. 6-10
- (11) 松岡紀雄『ボランティアを高く評価する社会』， 本の時遊社， 1997， pp. 7-8
- (12) 興梠寛『海外におけるボランティア活動の状況—世界はいまボランティア学習の時代—』（『教育と文化』第 44 号）， 神奈川県立教育センター， 1999， pp. 16-20
- (13) 興梠寛『ボランティア新時代に向かって—「断絶」の時代から「結ぶ」時代へ—』（『ボランティア白書 1999 わたしたちがつくる新しい「公共」』）， 社団法人日本青年奉仕協会， 1999， pp. 10-21
- (14) 前掲(3) pp. 62-74
- (15) 青少年問題審議会『「豊かさゆとりの時代」に向けての青少年育成の基本的方向—青少年期のボランティア活動の促進に向けて—（意見具申）』1994
- (16) 興梠寛『学生ボランティアへの要望等調査に関する考察』（『「学生のボランティア活動に関する調査」現状と課題』）， 財団法人内外学生センター， 1998， pp. 49-64